

サン＝テグジュペリの 〈悲しみと倦怠の2年半〉

平 井 裕

1932年、アルゼンチンからパリに戻り、家計状態が急速に悪くなりつつあったサン＝テグジュペリ夫妻は、『夜間飛行』の印税とフェミナ賞の賞金により、一時的な安定を得ることができた。しかし、仕事の単調さに不満を持っていたサン＝テグジュペリは、それを解消するためにヴォアザン社のパールグレーの乗用車を購入したり、友人たちを食事に招待したりで、後先のことも考えずに湯水のようにお金を使うのであった。一方、これといった収入のない母親はサン＝モーリス・ド・レマンの広大な館の維持と管理が負担となっていたので、息子がとりわけ楽しく安らかな素晴らしい幼年時代を過ごした思い出に満ちた館をリヨン市に売却することを決心した。6月、彼は会社から二週間の休暇を貰い、愛車でコンスエロと母親を訪ね、サン＝モーリス・ド・レマンからカンヌへの引っ越しを決めた母親の手助けをした。彼にとって悪いことは重なるもので、無免許のコンスエロがニースで起こしてしまった自動車事故の後始末の手伝いをするはめにもなった。

上司の注意や職務命令を無視したり、守らなかったりすることは以前にもサン＝テグジュペリにはあったが、7月1日までの休暇期間が過ぎたにもかかわらず、彼は会社に連絡を入れることなどはしなかった。7月28日、業を煮やした会社は厳しい内容の叱責文書を彼に送り、トゥールーズへ直ちに帰り、任務

に就くように命じた。

夫婦そろって気ままなお金の使い方をしていたので、当然のことながら家計状態が再び悪化していった。しかしながらサン＝テグジュペリは車を買換えたい衝動にかられ、以前からかねがね手に入れたと考えていたブガティー社の10万フラン以上もする高級スポーツカーまでも購入してしまった。コンスエロにしても、自動車事故の賠償金のために、亡き夫が遺してくれた南フランスのシミエにあった別荘を売りに出さなければならないはめになった。

8月、サン＝テグジュペリはトゥールーズからカサブランカへの転勤を命ぜられ、カサブランカとダカール間を飛ぶことになった。また、別荘の処分を終えたコンスエロは、家具付きの質素なアパルトマンに住む夫のもとに駆けつけたのであった。サン＝テグジュペリは相変わらずギヨメ等のパイロット仲間や会社の連中、彼が好意を持っていたフランス人やモロッコ人の友達を食事に誘い、自分の好きなアラブ料理の羊の丸焼きやクスクスなどをレストランで気前よくふるまった。更に、マントルピースの上に置いた小箱に常にお金を入れておき、サン＝テグジュペリ家に入出入りする者たちが、そのお金を自由に使えるようにしたこともあって、家計は以前にも増して火の車となっていった。サン＝テグジュペリの次の手紙を読むならば、当時の彼の胸中と生活ぶりが垣間見られるであろう。

「僕の憂鬱な気分は、僕の困難な生活からおそらく生じている。僕は勘定書の支払いをして時を過ごしている。それに僕がここでしている仕事はあまりにハードであるが、まるで焼き石に水だ。ちょうど収支バランスがとれたところだ……僕はお金にはほとんど執着しないほうなので、そうしたことはどうでもかまわないが、とはいえ少しずつ居心地の悪いような感じが大きくなってくる。僕の前に壁のようなものが立ちふさがっているみたいだ。僕の必要な金はどれも差し迫ったものばかりだ。本当に僕はほっと一息つきたいのだが⁽¹⁾。」

『夜間旅行』がフェミナ賞を受賞したことで、サン＝テグジュペリはその後、彼自身の意に反して、様々な中傷を受けた。多くのパイロット仲間は彼から離れ、また、アエロポスタル社の幹部たちは、その作品が社内の抗争以前に書かれたものであったにもかかわらず、会社を舞台とした作品を書き、ドーラの立場を擁護したものと不幸にも誤解をしていた。嫉妬や羨望もからみ、彼らはその後、サン＝テグジュペリを無視する態度を取り続けたので、サン＝テグジュペリは惨めな気持ちにもなり、精神的に深く傷付けられてしまった。お金が無い以上に彼を悩まし、耐えがたく、辛い気持ちにさせたのは、かつての友人たちによって、意識的に距離をおかれたり、無視されることの精神的な苦悩であった。友人ギヨメに宛てたサン＝テグジュペリの手紙を読むならば、当時の彼の胸中を推し量ることができるであろう。

「君は到着したようだね、それで心がちょっとわくわくするのだ。君が発発してから僕がどんなに恐ろしい生活を送ってきたか、どれほど大きな人生に対する嫌悪感を僕が少しずつ持つことができるようになったかを、知ってくれば！ 僕があのおつまらない本を書いたのだから、僕はやり切れなさと、仲間たちの反感を余儀なくされたのだ。僕に会おうとしないが、僕があれほど愛している連中が、僕について少しずつどんな評判を作り上げたかは、メルモーズが君に話してくれるだろう。僕がどれほど鼻持ちならないかを君は聞くだらう！ そして誰一人として、トゥールーズからダカルまで、それについて疑う者はいないよ。[……] 繰り返された僕の幻滅、あの不正な風評のために、僕は君に手紙が書けなかったのだ。おそらく君もまた、僕が変わったと思っていたのかもしれない。そして僕が兄弟と思っているおそらくはただ一人の人間の前で身の証しを立てようと決心できなかったのだ。エティエンヌまでが、もっとも僕はアメリカ以来一度も彼に会っていないのに、この土地で僕の友人たちに対して、僕が気取り屋になったと話しているのだ。それで素晴らしい仲間たちが僕についてそうしたイメージを抱くようになっ

たし、さらに『夜間飛行』を書くという過ちを犯した後に、路線で操縦しているということがスキャンダルになったのだから、人生は台無しだよ⁽²⁾。」

人間関係に疲れ、仕事に喜びを得られず、カサブランカにもあまり魅力を感じなくなっていたサン＝テグジュペリは、10月に入ると会社に休暇をまたしても願い出て、コンスエロの亡き夫が遺してくれたパリのマドレーヌ寺院の裏、カステラーヌ街10番地にあった4部屋のアパルトマンに身を落ちつけた。パリに戻ったとき、少し時間的な余裕が生まれるといつもそうであったが、ギヨメ、メルモーズ等の仲間と一緒に今回も、サン＝テグジュペリはアエロポスタル社にドーラの復職を働きかけ、個人でも丁寧な手紙を会社に出しさえもしている。この頃、アエロポスタル社は社長のラフォンが偽造文書とその行使により逮捕され、当初の財政上の問題が政財界を巻き込んだだけのスキャンダラスな事態から、新たな政治・司法上の大きな事件に変わってしまった。このような社内の混乱ゆえに、路線は縮小し、会社の機能も麻痺し始めた。一方、放火罪で訴訟を起こされていたドーラは無罪を勝ち取った、これはサン＝テグジュペリにとっても大きな喜びともなった。

1833年に入り、サン＝テグジュペリ夫妻の家計状況はますます悪化し、日常生活も落ち着いた状態には程遠く、夫婦不仲の風評が立ったりもした。サン＝テグジュペリは消滅寸前の会社に休暇を再度願い出る一方、エール・オリアン社に入社しようとした。しかし、ドーラの仇敵であった一人の技師がサン＝テグジュペリの入社に不利益な報告書を提出したために、入社を拒否されてしまった。8月、ドーラはアエロポスタル社に巡回監督官というただ単なる名誉職ではあったが、とにかく復職を果たすことができた。また8月31日、ダラディエ内閣の航空省の新しい大臣ピエール・コットの判断で、アエロポスタル社はCIDNA社、ファルマン社、エール・ユニオン社、エール・オリアン社と合併し、エール・フランス社として再出発することとなった。

1933年初頭で、出版されてから『夜間飛行』は自国で15万部以上の売れ行き

を示し、これはフェミナ賞とすれば異例の数字でもあったし、発刊後三ヵ月後には15ヵ国語に翻訳されることが決まったほど評判を呼んだのであった。この本の自国と外国からの印税が、これといった収入のない彼にとって貴重な収入源となった。アメリカ合衆国では、この作品はクラーク・ゲーブル、ヘレン・ヘイズを主演に配し、クレアランス・ブラウンによりハリウッドで映画化された。サン＝テグジュペリは『夜間飛行』が映画化されたことで、かなりのお金を期待したが、当時アメリカ合衆国では、彼の著作権はあまり保護されておらず、僅かな金額を手に入れたにすぎなかった。また、この映画は、1934年3月から6週間にわたりパリでも上映され、彼は時の人の仲間入りをし、文学に無縁の人たちからさえも、その顔を知られるようになった。しかしながら、この映画は、彼が『夜間飛行』で訴えようとした本質的な意味を伝える内容の出来映えではなかったので、彼をひどく落胆させたのであった。

仕事に行き詰まり、精神的にも参っていたサン＝テグジュペリをかねてから心配していたドーラの力添えにより、1933年10月、サン＝テグジュペリは、まだ飛行機メーカーとして存続していたラテコエール社にテストパイロットとして入社し、月額5,000フランの給料を受け取ることとなった。彼に与えられた主な仕事は以下のようなものであった。

生産された飛行機をトゥールーズからベルビニャン近郊のサン＝ローラン＝ド＝ラ＝サランク飛行場に運ぶことであり、次の仕事は車輪をフロートに付け換えられて水上機に改造された飛行機の性能を様々な条件下、例えば特別な状況を想定した条件下での抗力を計ったり、エンジンを全開にし、それを突然止めたり、離着陸を様々なスピードで試したりなどであった。このようなテストを繰り返しながら、データーをとつたり、技術上のチェックをしたりして、同時に安全性もあらゆる角度から確認することであった。実際、水上機のテストパイロットの仕事はかなりの緻密さと集中力を要求される内容のものであり、あまり彼には向いていなかったようであり、要求されたデーターが報告できな

かったり、自らの不注意で不時着したりといったいくつかの小さな事故を起こしてしまっていたが、そのなかでも命を落とし損なった最も大きな事故は、サン＝ラファエル湾で起こしたものだだった。

12月21日、サン＝テグジュペリは試作モデル水上機をサランク飛行場からサン＝ラファエル湾の海軍基地にあったテストセンターまで運んでいく任務を与えられた。サン＝テグジュペリの横には海軍中尉のバタイユ、その後ろにメイエルという技術担当の政府派遣のエンジニア、ずっと後ろの機関銃席にはヴェルジェという整備士の3人を乗せた水上機はサン＝ラファエル湾に着水寸前までは順調な飛行を続けていた。しかし、原因はいまだはっきりしないが、水上機の肩翼が外れて落ちたか、一瞬ぼんやりしていて、水上機であることを忘れてしまい、尾翼を下げる操作が遅れたか、とにかく着水がうまくいかなかった。たちまち機内に水が入り込み、機首からもぐりはじめ、尾翼が上になり、腹をみせるように転覆してしまった。中尉は操縦席の上の風防ガラスの上部の窓を開けて機内から抜け出した。整備士も機関銃用の円形の風防ガラスの開口部から水中に泳ぎ出た。二人は救命艇が来るまで、少しずつ沈んでいく機体の回りを泳いでいたが、サン＝テグジュペリとメイエルの姿が見えないのに気が付いた。整備士が後部救助用の扉に泳ぎ着くと、その扉は歪み動かなくなってしまう。彼はその扉の隙間になんとか指を滑り込ませ、次にその隙間に足をさしこみ、踏ん張るようにして扉を曲げ、とうとう扉を外してしまった。彼は扉のすぐ近くで、打撲傷を負い、また泳ぎのできないメイエルが体を丸めるようにして、すでに大量の水を飲みこみ、ぐったりしているのを見つけた。泳ぎ着いた中尉と共に整備士はメイエルを抱き抱えるようにして機内から水中に脱出させ、駆けつけた救命艇の乗務員の力を借りて、メイエルを救命艇の上に引きずり上げた。その間、サン＝テグジュペリは操縦席から尾翼の方に向かい、水かさが増してきたが、まだ何とか息のできるエアークケットのようなところへ移動していた。意識を時々失いかけてながらも、恐怖感に襲われず、それどこ

ろか不思議なことに途方もない内的な安らぎと幸福な時間を味わっていた。後になって、サン＝テグジュペリはこの事故の印象を、「僕はあまり苦しまなかった。」また、「水はとても冷たかったのに、僕には生暖かく思えた。いや、もっと正確には、僕の意識は水の温度のことなどに及ばなかった。僕の意識は別のことに心を奪われていたのだ⁽³⁾。」と思い出している。

しかしながら、いつまでも水に浸かったままでは死んでしまうと我に返ったサン＝テグジュペリはメイエルが脱出した扉からのぼんやりとした微かな光に気がつき、その明かりを目指し、再び水に潜って機外にかろうじて泳ぎ出て、救命艇に引き上げられた。水を多量に飲み、もう少して溺れてしまうところであり、ふらふらの状態の彼は救命艇の上で飲み込んだ汚れた水をかなり長い時間苦しげに吐き出し続けたのであった。

こうしたひどい事故を起こしてしまったが、再び飛行機に搭乗できるようになったこと、とりわけ水上飛行機の操縦は初めての体験でもあったので、サン＝テグジュペリにとって大きな喜びであり、その時の感激と受けた印象、感覚をこう書き残している。

「離陸するパイロットは、水と空気との接触に入る。エンジンがかかり、飛行機がすでに海を切るように進むとき、固い波音に触れると機体は銅羅のように鳴り響き、そして彼は自分の腰の揺れによってその動きを追い続けることができる。水上機が刻一刻と速度を増すにつれて、彼は能力で満たされるのを感じる。パイロットはこの15トンの物質の中に、飛行を可能にするあの成熟が準備されるのを感じる。パイロットは操縦桿を握りしめる、すると少しずつ、そのくぼんだ手のひらに、この能力を天の賜物として受け取るのだ。操縦桿という金属の装置は、この天の賜物が彼に与えられるにつれて、彼の能力の使者となるのだ。この力が成熟した時、花を摘みとるより一層しなやかな動きで、パイロットは機体を水から引き離し、空中に浮かび上がらせるのである⁽⁴⁾。」

水上機に搭乗している時には、以前郵便路線飛行に従事した際に実感することのできた仕事を通じての連帯感、友情、満足感を得られなかったサン＝テグジュペリではあったが、ともかくも飛行機を操縦できる環境に再び戻れたこと、とりわけ初めて水上飛行機を操縦することで得られた感激と喜びは上記の文章から容易に想像できるのである。しかしながら、自分の与えられた仕事に心底打ち込めない彼は、仕事から開放され宿泊していたペルピニャンのホテルに戻り、一息つくと、言い知れぬ淋しさに襲われ、とても辛く、憂鬱な時間を過ごすこともよくあったようである。ペルピニャンのあるカフェのテラスで、夕方、ワインを飲みながらサン＝テグジュペリが友人に宛てた手紙には、当時の彼の日常生活、人生観、平凡で容易な生活のなかで時間を過ごす彼の嫌悪する世界、絶えざる関心事を読み取れるのである。

「ここでは、僕はたった一人で生活している、というのもトゥールーズ、ペルピニャン、サン＝ラファエルの間で行き来しているだけなのだ。僕は毎日、海でも湖でもない池のようなところで過ごしているが、生命のない単なる広がりであり、僕は好きになれない。海は別だが、塩分を含んだ水はいつも悲しげであり、僕には分からない。[……] 本当の湖は、その周囲に、控えめに、そして互いに見つめ合う家々が立ち並んでいて、幸福のイマージュのように思える。もし向かいの家の娘が好きになれば、その娘は親しいのだが近寄りたがる存在となって、そのことが思いがけずわくわくした気持ちにさせる。その永遠の港に繋がれている小舟は、その働きをきちんと決められていると感じられる。しかし、僕が毎日過ごすサン＝ローラン・ド・サランクでは、腐った海藻の匂いばかりがする。そしてそれはどこにも導いてはくれない、自分自身の内部にも。ここには僕には幸福がない。

だから、夕方になり僕がペルピニャンに戻ると、今晚のような夜がいつまでもだらだらと続くのだ。ここには僕の知り合いは誰もいないし、それにまして知り合おうとも思わない。この手紙を書いている片隅で、僕の耳に入る

笑い声や勿体ぶった言葉が僕を苦しめる。まるでそれは煮えるポトフの小さな音のようだ。ここの連中は死ぬまでゆっくりと煮られるようにして日々を生きているようだ。こうした人生が何に役立つのだろう？ もっとも僕は二人の友だちの訪問を受けたよ。落ち着いた、おそらくは幸福な若いカップルだったが、僕にはとげとげしい感じがした。余りにも安定してしまった人たちのあの不機嫌さを君は知っているね。はっきりとしないあのつまらぬ夫婦喧嘩で破綻してしまう連中を。幸福の中に潜む底知れぬあの恨みを。二人が立ち去って、僕はほっと一息ついた。僕はそれでもやはり彼らがとても好きだが、僕はある種の平和を憎んでいるのさ。潮風のように爽やかな人々もいると君は思わないか⁽⁵⁾？」

この長い手紙のなかで示されているような人生と日々の生活は、人々を本当の意味ある人生から遠ざけるものであると考え、何としてももっと活き活きとし、緊張感のあるより高い世界を目指していくべきであると友だちに訴えているのであり、当時のサン＝テグジュペリの悲痛な叫びと精神的な焦りを感じるのである。

サン＝テグジュペリが起こしたサン＝ラファエル湾での今回の事故は、幸いにも一人も死傷者を出さなかったのであるが、会社側は見過ごすことのできない重大なものと判断したので、彼の職務を解かざるを得なかった。心づもりしていたよりも早く解雇されたわけであり、確かに彼にとっては残念な結果であった。しかし、テストパイロットの体験は大変短い期間であったので、特にその後のサン＝テグジュペリの人生に深い痕跡を留めなかったと言えるであろう。

今回のテスト飛行の機会を利用して、アゲーに住む妹のガブリエルに再会することを考え、サン＝テグジュペリはパリからコンスエロをベルピニャンのホテルに呼び寄せていた。思ってもみなかった解雇という事態になり、気の重いサン＝テグジュペリであったが、妻と一緒にガブリエル夫妻を訪ね、クリスマ

スと一緒に過ごしてからパリのアパートマンに戻った。

もはや仕事もなくなり、経済的にも追い詰められ、更にそうしたこと以上に、パイロットとしてのサン＝テグジュペリの資質についての痛烈な皮肉すら、彼の耳に入ってきた。確かに今回の事故は、パイロットの職歴に不名誉なことであった。1934年は、彼にとってこうした追い詰められた状況で始まったが、4月、以前から希望していたエール・フランス社から、公式な誘いを受け、定期路線のパイロットとして入社し、月額4,800フランを受け取ることとなった。しかしながら、この給料はかつてアルゼンチンで得ていた給料の五分の一であり、当時のフランスでは不況とデフレ政策の結果、物価が下がっていたとしても、彼が心づもりしていた額をかなり下回るものであった。

入社後、会社側はサン＝テグジュペリの作家としての名声を利用し、会社のイメージを高めたい思惑もあり、彼を宣伝課に配属した。この処遇はパイロットとして入社した彼にとって不本意なことであったが、宣伝部員として会社の方針に従い、命じられた先の講演会場に出向くことになった。

この頃、フランスにも飛行クラブが誕生し、それと共に飛行機に対するスポーツ的な面も飛行愛好家に芽生え始めていた。また、飛行家の間でも競技飛行や長距離飛行が行われ、とりわけ世界の人々を驚かすような偉業も海外で続々と生まれていた。主だったものでも次のようなものがあった。

リンドバーグによるニューヨーク・パリ間、33時間での無着陸大西洋横断単独飛行、イギリスの女流飛行家モリソンによるイギリス・オーストラリア間の最初的女子単独飛行、日本・ケープ・タウン間の往復記録飛行、また夫の飛行家と共にイギリス・インド間の記録飛行、アメリカの女流飛行家エアハートによる女性として初めての大西洋横断などである。

こうした飛行機による素晴らしい快挙は、当然のことながら一般大衆の飛行機に対する関心を高め、サン＝テグジュペリは行く先々の講演会場で歓迎された。講演の中で、彼はエール・フランス社の紹介、飛行機と当時の飛行事業及

び将来への展望、かつての郵便飛行事情とかつての苦労の数々、素晴らしい飛行仲間、個人的な忘れがたい貴重な体験などについて語るのであった。講演で飛行機を利用する際には、彼は信頼する老練な整備士プレヴォーを同伴し、講演先はフランス国内のみならず、ヨーロッパ各国、北アフリカ、中東、更にはサイゴンやブノンペンにまで足をのばした。

サン＝テグジュペリにとって、講演はそれほど得意ではなかったようである。話が活気を帯び、スムーズに話せるようになるのにしばしばかなりの時間がかかった。また会場の聴衆と雰囲気がうまく合った場合には、当然ながらよみなく話が展開し、彼らをごく自然に自分の世界に引きずり込み、楽しい気分と心の琴線に触れさせることができた。逆に、彼自身その場の雰囲気に入り込めない時には、ただ与えられた時間を消化しなければならないという気持ちになるので、当然ながら聴衆に話しかけても彼らの期待に答えられず、義務的に仕方なく話を続け、彼らを失望させることもよくあったようである。このような彼の講演には当然ながら出来不出来もあり、余り情熱を感じなかった仕事ではあったが、飛行機を操縦し、各地を訪ねることができるのは、彼にとって楽しいことであり、講演の仕事を翌年まで続けたのだった。

仕事を再開したサン＝テグジュペリであったが、家計は苦しく、7月に入り、カステラーヌ街から7区のシャナレイユ街のアパルトマンへの引っ越しを余儀なくされた。コンスエロはカステラーヌ街の亡き夫のアパルトマンを手放すことに全くためらいはなかった、彼にしても好きな左岸に住めるようになったことに満足したのであった。カステラーヌ街の3階にある4部屋のアパルトマンの家賃は年に7,250フランであった。中庭にはマロニエが植えられ、北側の通りに面した窓からは、アンヴァリッド廃兵院の大ドームや緑豊かな公園を遠くに見ることができた。

部屋には家財らしいものもなく、しばらくすると、どの部屋も散らかり始め、床に座り、膝の上で食事を取ることを余儀なくされることもあった。サン＝テ

グジュペリの部屋には、本、書類、筆記具、葉巻、睡眠薬などが散らばり、ほつれたセーター、着古し、すっかりぼろぼろになった背広、汚れたワイシャツや靴下なども部屋の隅々に積み重なり、底の抜けた靴が転がるような散々たる有り様であった。コンスエロは彫刻を始めたので、彼女の部屋には石の魂、粘土などが運び込まれ、まるでがらくた置場と化した。このような状況の自宅で、サン＝テグジュペリは落ち着いてくつろぐ気分には到底なれなかった。彼にとって、コンスエロは安らぎを与えてくれる普通の家庭の主婦ではなく、また仕事の良きパートナーでもなかった。彼は妻に仕事の理解者、協力者であって欲しいと願っていたが、なかなか思うにまかせなかった。二人は現代風のカップルであったとも言えるであろうが、当時の周囲の人たちは奇妙な同居生活をしている夫婦と彼らを眺めていたようである。生活がひびくとしても、生活を切り詰め、つましく地道に暮らし、せっせと蓄えができるタイプの二人ではなかった。

このような混乱した二人の生活であったので、家計状況は一向に好転せず家賃さえ負担になったが、サン＝テグジュペリにとって唯一の楽しみは相変わらずスポーツカーを乗り回し、気分転換を図ることであった。こうするうちに家賃の支払いが滞りがちとなり、税金の滞納により、税務署から差押さへの令状を受け取ったり、電話も切られ、ガス、電気料金も払えなくなり、寒くなっても暖房が使えず、寒い部屋で生活することを余儀なくされた。サン＝テグジュペリは、後年この時代を《青の時代》と自ら回想している。この時期、彼は雑誌に飛行記事を書くように頼まれたが、興味を引かれ、書く気分になって初めて情熱を注ぎ、気力を込めて文章を書くタイプの人間であったので、相手の注文に合うように器用に文章を書くような仕事はできなかった。それゆえに仕事量はさして多くなかったが、何本かの原稿を書いている。

彼が原稿を書くのは、ほとんどもっぱら、サン＝ジェルマン＝デ＝ブレにあったカフェ・デ・ドゥ・マゴのようなカフェであった。求職中であり、これ

といった約束もない日には、肩で息するかのように、苦しげな様子でパリを当てもなく歩き回るサン＝テグジュペリが目撃されたようであり、疲れると知り合いのいることの多いカフェで一息入れるのであった。

「不安げで、苦しげで、しばしば放心しているか、いらいらしているような彼がリップやドゥ・マゴでときおり見受けられた。店で彼は《酒》、あまりにも酒を飲みすぎていたのも、その証拠に肝臓をやられてしまっていた。彼はとても太り、むくんでしまい、そして、あのぼっちゃりした顔のなかで、彼の眼差しはいつそう憂いを誘うようであり、驚いたようにも見受けられた。まるで、彼は自分自身にこう言い聞かせているようであった。『どうしてあなたは僕にこんなにも辛い思いをさせるのか?』と⁽⁶⁾。」

サン＝テグジュペリはこうした最悪の状態を一刻も早く何とか打開しなければならなかった。作家としてのサン＝テグジュペリは今まで政治的なことに関心を持たず、何らかの政党に与したイデオロギーの発言もなかった。しかしながら、徐々にではあったが、フランスやヨーロッパで起きていた出来事や全体主義体制のドイツ、イタリア、またロシアの事情に関心を持ち始めていた。「パリ＝スワール」紙の主筆であったピエール・ラザレフは、サン＝テグジュペリが作家としての知名度があり、公平な立場と視点で見聞した事実を正確に報告できる特派員に適任であると、かねてから判断していた。ラザレフはサン＝テグジュペリにモスクワに特派員として行く気があるかどうか打診した。

サン＝テグジュペリはラザレフの期待に答えられるかどうか不安であり、躊躇もしたが、それ以上に困窮してお金を少しでも稼がなくてはならず、新しい道も開かれるかもしれないという期待もふくらみ、ロシアを訪問するチャンス을大事にしたいと結論を出し、ラザレフの申し出を引き受けた。

申し出を引き受けたが、不安になったサン＝テグジュペリは特派員の仕事を責任をもって果たせるように、出発まで亡命していたロシア人からロシアに関してのわか勉強までしたのであった。

1939年4月27日、パリ東駅からロシア行きの国際急行列車に乗り込み、寝台車に身を落ち着け、体を伸ばしてみたが、妙に興奮し寝つかれず、車軸の軋る音、線路の継ぎ目の音に耳を澄ませていた。午前一時ごろになっても寝つかれないサン＝テグジュペリは、列車の中を歩いてみようと思いついた。寝台車も一等車も空っぽであったが、飯場のような仕切りのない三等車に足を踏み入れると、解雇されポーランドに帰る数百人の労働者が身を寄せ合っていた。小さなランプの青白い光に照らされた彼らは悪夢と惨めな境遇に落ち込んで行く人たちであり、持ち物といえば、鍋や釜といった台所用品、テーブルクロス、カーテンなどの日用品を詰め込んだ行李だけであった。疲れ切り、眠り込んだ母親の乳房を赤ん坊がしゃぶっていた。次に父親の方に目を向けると、頭を下げ、海老のように体を曲げ、仕事着に身を包み、粘土の塊のようであった。男も、女も、子供も、安らぎを見いだせずに眠り込み、車輪の音と振動に攻められていたようであった。サン＝テグジュペリの耳には、疲れを感じさせる深いいびき、何かはっきりしないしわがれたうめき声、どた靴の擦れ合う音などが聞こえてくるのであった。

サン＝テグジュペリが一組の夫婦の前に座ると、両親の間のわずかな隙間に挟まれるようにして、一人の子供が眠っているのをまたもや目にした。その子が寝返りをうったので、その子の顔が小さな常夜灯で照らされたのであった。みすばらしく、生活の重荷を背負いこんだこの夫婦から生まれた、つややかな額、おちょぼ口のやさしい表情をしているその子をじっと覗き込むと、サン＝テグジュペリはこうつぶやくのだった。

「これこそ音楽家の顔だ。これこそ子供のモーツアルトだ。素晴らしい人生が約束された顔だ！ 伝説に出てくる可愛らしい王子さまと少しも変わりがないのだ。庇護され、骨身惜しまず世話され、育まれたなら、この子にとって将来成れないものなどあるだろうか？ 突然変異で庭に新種のバラが花を咲かすと、庭師たちは誰だって興奮するものだ。すると、そのバラを別に移

し、育て、特別にかわいがる。けれども人間たちのための庭師はいないのだ。子供のモーツアルトもやがて他の子供たちと同じように型打ち機で刻印を押されてしまうだろう。このモーツアルトも、カフェ・コンセルの悪臭に染まり腐敗した音楽に、己の最大の喜びを見いだすことになるだろう。このモーツアルトはそうなるように、運命の宣告を受けてしまっているのだ……⁽⁷⁾」

サン＝テグジュペリが、この子供のモーツアルトを目撃して何よりも心を傷めていたのは、この子供が本来持っているであろう様々な可能性や資質を花咲かせることのないまま人生の大きなうねりの中に巻き込まれて、一気に流されてしまうことを案じたのであった。これは子供に限ったことではなく、当時の人たちも、本来持っていたモーツアルトを生かすことができずにいること、すなわち各自の自己のうちに秘められている内部での虐殺を、サン＝テグジュペリは嘆き悲しんでいるのである。彼がこうした人間たちに手をさし伸ばしてくれる庭師の出現、それ以上に真の意味での各自の人間復興、すなわちモーツアルトの復興が何よりも先決であると実感したのであった。

列車は平原と森を突っ切って進んで行く。やがてドイツに入り、乗務員もドイツ人に変わり、食堂車のボーイにしても大貴族のような冷やかな礼儀正しさが感じられ、きびきびと自分の職務をこなす、非の打ち所のないサービスが心掛けていた。サン＝テグジュペリはこのようなドイツ人に好感を持ちながらも、フランスのあの生きることの快さや誰とでも血のつながりを感じられるあの親近感は、実に素晴らしいものであると改めて実感するのであった。サン＝テグジュペリの耳には、スターリン、それから五ヵ年計画、さらには既に実行されつつあるいろいろな事柄についての会話が聞こえてくる。彼はこう思うのであった。

「ひとたびフランスの国境を越えると、もはやほとんど春について関心を持たなくなるが、おそらくそのかわりに人間の運命についてずっと心配するこ

とになる⁽⁸⁾。」

4月29日、ロシアの国境から30分ほど過ぎたニエゴルロイ駅に、列車は着いた。サン＝テグジュペリは乗り換えのために列車から降りた。税関の部屋が広々とし、風通しもよく、ぴかぴかに輝き、パーティー会場にも利用できそうな雰囲気をもっていたり、駅のビュッフェも広く、ジプシーの楽団が夕食客のために静かに演奏しているのを見たりした時、サン＝テグジュペリがおそらくは彼自身想像していたであろうロシアとの落差に驚かされ、当惑してしまい、一体革命がどこにあるのかと自問したことは、容易に考えられるのである。

乗り換えた列車がモスクワに近づき始める頃、朝を迎えた。サン＝テグジュペリは上空に偶然にも間近に迫った式典のための機影を認め、急いで数えてみると71機が練習飛行をしていた。更に、モスクワの町がまるでひとつの塊のように突然迫って来て押しつぶされるような印象を受けた。

「こんなふうに僕の受けた最初のイメージは、蜜蜂の群れの下でバイタリティーにあふれた巨大な蜜蜂の巣箱のようなものだった⁽⁹⁾。」

モスクワ駅に着いたサン＝テグジュペリは、すでにソ連でジャーナリストの仕事をしていたジョルジュ・ケッセルの出迎えを受けた。ケッセルは赤帽にサン＝テグジュペリの荷物をタクシーまで運ばせた。その間に、サン＝テグジュペリが目にしたのは、どこの国でも見られる日常的な光景、すなわち、唸りを立てて走り回るトラック、数珠つなぎになった路面電車、兵士や子供たちに取り囲まれた砂糖菓子売りの女行商人たちであった。彼にとって生活の領域では、もはや驚くことは何もなく、もしもロシアの未知なる姿と革命によってこの国がどれほど大きく変わったかを見出すためには、別の場所に行かなくてはならないと思ったのである。彼らはタクシーに乗り込み、部屋のとれていたホテル・サヴォイに向かったのであった。

5月1日、サン＝テグジュペリは早く床を抜け出した。それは《赤の広場》でのメーデーのパレードを見物するための席をいろいろ手を尽くしたのにもか

かわらず確保することができなかったからであった。外出しようとしたが、ホテルの出入口は無表情な警察官によって警備されていて、一步も外に出ることは不可能であった。ホールの中を、どのようにして脱出していいものか考えながら行きつ戻りつしていると、突然、雷でも近づくようなエンジンのとどろく音と共に、一千機の飛行機が丸屋根、群衆、建物を威圧するかのように町に向かい飛行してきた。その挑発するように響きわたる重苦しい音が、サン＝テグジュペリを元気づけてしまった。彼は閉め忘れてあった窓とテラスを利用して、幸運にもホテルから人影のない通りに飛び出すことができた。音の方に眼を上げ、壁にもたれかけたままの彼は青光りする三角形のいくつかの飛行編隊を目撃したのであった。その数分間に受けた印象をこう書き留めている。

「いくつかのグループに分かれた飛行機のきちんとした配列は、それぞれの編隊に武器としてのまとまりがあることを見せていた。この黒い塊のゆっくりした進行、一千機のいっばいに響きわたる、重々しい、いつまでも続くどろき、すべてそうしたものが、あまりにも胸を締めつけるような光景を作り上げていたので、誰もがあの支配されているという印象から逃れることができなかった¹⁰⁾。」

がらんとしたいくつかの通りを抜け、警官の立つ警戒線を何か所か越えて、サン＝テグジュペリは《赤の広場》に流れる数キロにもわたってえんえんと続くゆっくりした列にやっと加わることができた。赤い小旗を手にし、黒っぽい、くすんだ洋服を身につけた民衆は、まるで葬儀に向かうような重い足取りであり、それが彼には逆に冷たく威圧される印象であった。ゆっくり流れる黒い溶岩のような人波が突然止まり、そのままの状態で、まだまだ凍りつくような寒さのなかで、我慢強く、いつまでも、広場に入れるのを人々は待ち続けていた。

突然、アコーディオンの音が流れ始め、それに合わせるかのように楽器を手にしていたブラスバンドの連中が輪になり演奏を始めたのだった。すると民衆は、まるでフランスの革命記念日の夜にバステュー広場で繰り上げられるよ

うな様子を見せ始めた。長い通りには穏やかな、家庭的な雰囲気生まれ、人々が輪になって踊り始めた。勿論、それは寒さから身を守るため、または気晴らしをするためであったかもしれないが、彼らの顔は緊張から解放され、唇には微笑がわずかに見られ、幸福そうに見えたのだった。

こうした雰囲気のなかで、サン＝テグジュペリ自身すら思ってもみなかったことが、彼に起こった。突然、彼は見知らぬ男から不意に呼びかけられ、タバコを勧められた。するとまた別の男が火をつけてくれた。サン＝テグジュペリは、ロシアの民衆は仕事着、肉体、思想にいたるまで徹底的にコントロールされていると考えていた。彼らと初めてじかに接したことで、このようなロシアの人々の姿に深い感動を覚えたのであり、彼はこう伝えている。

「すると突然、奇跡のようなことが起こった。この奇跡とは、人間性を取り戻したことであり、あのまとまりから生きている個人への細分化であった⁽¹¹⁾。」

その後、人波が生じ、再び列が作られ、旗がたてられ、赤い小旗を手にし、冷静さを取り戻し、重々しい様子に戻った人々が、スターリンが姿を見せる広場へとゆっくりと向かうのであった。

また、モスクワ滞在中に、サン＝テグジュペリは当時世界最大の飛行機、マクシム・ゴーリキ号に、外国人として搭乗を許された名誉に浴した最初で、また最後の人となった。ロシア空軍が自慢にしていたこの飛行機は、重量42トン、翼長63メートル、機体の長さ32メートル、8基のエンジンは7千馬力であり、巡航速度260キロであった。彼が搭乗した翌日、この飛行機は降下姿勢に入ろうとしていた時に、400キロ以上の速度を出していた戦闘機によって追突され、空中分解するといった悲劇的な最期を終えたのであった。

モスクワ滞在中に、サン＝テグジュペリは『パリ＝ソワール』紙に、「一千機の爆音のもと、モスクワ全市は革命記念日を祝った」、「ソ連邦に向かって、夜汽車の中で、本国に帰るポーランドの炭鉱夫に囲まれ、子供のモーツァルト

が眠っていた。その子は伝説の小さな王子と少しも変わらなかった」,「モスクワ! だが革命はどこにか?」,「ソ連の裁判での罪と罰」,「マクシム・ゴーリキ号の悲劇的な最期」,「奇妙な夜の集い, 20年間を嘆き悲しむ, 少しばかり酔ったグザヴィエ嬢と10人のおばあさんと共に」といった記事を送った。

彼の記事は、フランス国民がおそらく関心を寄せていたであろう厚い壁のソ連の抱えていた問題、状況に関する最新の情報には乏しく、そのようなものを期待していた読者にとっては物足りない内容であった。しかしながら、他のジャーナリストと異なる視点で、取材し、記事にしたものであった。それらの記事はサン＝テグジュペリがいつもこだわり続けている自分の目で確かめ、体験し、印象深かったものをベースにし、自分の内にある関心や問題意識を織り込むようにして書いた結果、きわめて新鮮で、生き生きとし、独創的な仕上がりであり、読者の間でセンセーションを巻き起こし、また、彼が政治的に全く中立であったことも読者に好感を与えたのである。

5月10日までモスクワに滞在し、その後パリに戻ったサン＝テグジュペリは、記事の評判が良かったのを聞いて、ジャーナリストとしてもやれる自信が生まれたのであった。



本稿では、1932年から1935年までの2年半にわたるサン＝テグジュペリの足跡をたどったわけであるが、この時期での最大の収穫、彼の内部に大きな印象を残したのは、モスクワへの汽車の中で目撃したひとりの少年モーツアルトのことであったと思われる。更にもう少し大きな観点から見ると、モスクワ旅行が国内外での政治的な動きや出来事にあまりにも無関心であったサン＝テグジュペリに、そうしたものに関心を持たせ、今後の彼の生き方を変えさせることになった大きな機会ではなかったかと思われる。

- 注(1) Pierre Chevrier: Antoine de Saint-Exupéry, pp. 99-100.
(2) Richard Rumbold et Margaret Stewart: Saint-Exupéry tel quel, pp. 184-185.
(3) Terre des hommes, p. 223.
(4) ibid., p. 170.
(5) Pierre Chevrier: Antoine de Saint-Exupéry, p. 102.
(6) Richard Rumbold et Margaret Stewart: Saint-Exupéry tel quel, p. 186.
(7) Un sens à la vie, pp. 46-47.
(8) ibid., p. 50.
(9) ibid., p. 53.
(10) ibid., p. 39.
(11) ibid., p. 40.

主要参考書目

Œuvres d'Antoine de Saint-Exupéry, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959.
Ce volume contient: Courrier Sud, Vol de nuit, Pilote de guerre, etc.
Un sens à la vie, Gallimard, 1963.
Pierre Chevrier, Antoine de Saint-Exupéry, Gallimard, 1984.
Richard Rumbold et Margaret Stewart: Saint-Exupéry tel quel, Del Duca, 1960.
Curtis Cate, Saint-Exupéry, Grasset, 1994.
Eric Deschodt: Saint-Exupéry, biographie, J. -C. Lattès, 1980.